



四国4県の全労連は1日、高松市で四国総行動にとりくみ、約1000人が決起集会をしました。日本共産党の白川よう子衆院四国比例候補が連帯

全労連の四国4県連

賃上げを必ず！ 高松で四国総行動

あいさつ。 JAL（日本航空）争議団や全医労による訴えが行われました。全医労の代表は賃金交渉が前進し、2年連続ストライキは回避と報告し、声を上げ続ける重要性を強調。十河浩二香川県労連議長が「軍事費ではなく国民向け予算の増額を。物価高騰を上回る賃金増額で労働者、国民の生活改善を勝ち取る」と団結を呼びかけ、デモ行進をしました。白川氏は、裏金問題究明に背を向けたまま予算採決を強行しよう

民主香川

定価 月 100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
3丁目13-14
☎(087)834-7311

3・13重税反対全国統一行動 裏金許さず！ インボイス廃止！

民主商工会や農民連が中心になり、3・13重税反対全国統一行動が香川県内6か所であり13日に高松市では162人が集団申告。増尾啓二高松民商会長が納税者の権利を訴えました。日本共産党の白川よう子衆院四国比例候補があいさつし、「市民は一枚一枚領収書が必



要なもの、自民党国会議員には裏金事件で不記載という政治資金規正法違反か、脱税か、公職選挙法違反かの三つの疑念がある。私たちの税金は大軍拡にはなく、業者の経営や震災復興など社会保障や生活のために使うべきだ」と訴えました。「消費税のインボイスに苦しむ我々にとっては、裏金事件には特に怒りがわく」と参加者の声がありました。

異台太

「春雨じゃ、ぬれていこう」というにはにすこし重たい雨脚だ。四、五百メートル離れた里山もすっぽりと雨つぶにおおわれ、二〇センチほどに伸びた麦や野菜のみどりや濃い畑にはいいおしめりだ▼

「大手賃上げ高水準相次ぐ・鉄鋼は10%超え」（毎日）、「春闘、大手が満額回答・物価高対抗、要求超えも」（四国）と働くものにはうれしい見出しが躍っている。でも中小企業にはどう現れるか。ましてや年金生活者のところへは……。「物価負担増 年28万円、22年以降の値上がりで」（しんぶん赤旗）というように暮らして生やさしいものではない▼自民党さんは「裏金」、政治資金パーティーという、抜け道を使って企業献金を懐に入れて財界向けの政策をすすめる。消費税増税、賃上げ上回る物価高とくる。庶民の暮らしを守るうしない政治勢力には退場していただくしかない▼高松港へ自衛隊の軍艦が現れるなど、戦争の匂い振りまくことはやめていただこう。瀬戸内海は暮らしを支える大事な海。その要が高松港だ。いくさとは無縁、平和の港だ。

すべての子どもたち によりよい保育を！

私たちが香川保育問題連絡会は、秋から全国的に取り組んでいる『すべての子どもに安心・安全で質の高い保育を平等に予算の増額と保育士の増員を』と署名運動に取り組んでいきました。

団体紹介：香川保育問題連絡会

現在、国が定める基準では保育士1人が受け持つ子どもの人数は、1歳児で6人、4〜5歳児で30人などとなっています。日本の保育士配置基準は、他国に比べてあまりにも低く、戦後ほとんど改善されていません。子どもは興味関心に寄り添い、子どものやりたいことを援助していくには、今の配置基準では低すぎると感じています。そういった現場の声を、多くの方に知ってもらうために、自治体キヤラバに参画して現場の声を届けてきました。また、香川県下の保育園・こども園に署名の協力を募り、街頭署名も行いました。私たちの呼びかけに足を止め、話を聞いてくれる方や、「保育士さん大変ですね。頑張ってください。」と温かい言葉をかけてくれる方もいて、私たちの励みにもなりました。こうして香川で集めた署名6000筆を持って、国会要請行動に若手保育士2人が代表として参加しました。全国の仲間たちの熱い思い、オンラインでは感じる事が出来ない熱量を感じ取り、自分たちがよりよい保育を実現させるために頑張らなければと明日の活力を得て帰ってきてくれました。



讃岐の文学碑めぐり ⑭ 小林 一茶

一茶の西国行脚の拠点となった専念寺（観音寺市）
文・写真 深沢 雨根

一茶（本名・小林弥太郎）は市大和町にある。信濃国柏原の中農の生まれで、十五歳で江戸へ奉公に出された。やがて俳句の世界と出会い、俳諧師になろうと決意する。江戸時代の俳諧師は、芭蕉が東国を放浪したように、修行の旅に出る習わしがあった。師匠の紹介状をもって各地の有名俳人を訪ねて回るのである。一茶は、一七九二年から九七年にかけて、西国への大旅行に出た。二十九歳から三十代の前半である。もちろん金はない。地方の著名人の家に泊まり、ただ飯を食わしてもらいながら、俳諧修行に励むのである。

一茶の師匠だった二六庵竹阿（一七一〇〜九〇）は、大阪に長年住んでいた人で、西国に門弟が多かった。一茶の西国修行の拠点になったのが、讃岐の専念寺であった。専念寺は観音寺

一茶は専念寺の住職・五梅（俳号）を訪ねてきた。五梅和尚は一茶と同じく、二六庵竹阿の弟子であった。一茶の『西国紀行』（寛政七年紀行）ともいう）には次のように記されている。この専念精舎に住せる五梅法師は、あの師の門に遊びたまひしときくからに、予したひ来ゆしばらくづ、の旅愁を休むることしばしば、さらに我宿のごとくして、已四とせの昵近とは也けらし（『一茶全集』第五巻、信濃毎日新聞社、三九頁）

一茶にとって専念寺は、「我宿のごとく」だったのである。そして、「四とせの昵近とはなり」とあるように、それ以後足かけ四年にわたってこの寺の世界になるのである。

専念寺から一茶は九州を歴訪



専念寺の句碑

し、寛政六年の年末、再び専念寺を訪れている。越年して正月に詠んだのが次の一句である。

元旦や さらに旅籠とおもほへず

この句碑が専念寺の境内に建てられている。句の意味は、「ここではいつも良いもてなしを受けたので、旅の宿とはとても思えない」というもの。この正月には、讃岐富士（飯野山）を見て次の歌も詠んでいる。

これやこの さぬきふじてふ 足引の 山をし見れば あづまこひしも